京都大学図書館機構　平成23年度第1回講演会

「図書館は学生の現在（いま）にどう応えるか？―変わりゆく「学び」と大学図書館―」

日時：平成23年10月11日（火）　13：30～16：50
場所：京都大学附属図書館ライブラリホール（3階）

京都大学図書館機構では、学生の生活実態や大学における教育・学習方法の変化に焦点を当て、大学図書館の果たす役割について再考する講演会を企画・実施しました。
当日は学内外から計131名が参加し、講演の様子はUstreamにて同時公開しました。

京都大学オープンコースウェア（OCW）にて公開中
http://ocw.kyoto-u.ac.jp/library-network/04

講演１：学生の学習・生活実態と求められるアクティブラーニング

京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授　　溝上 慎一

１．大学教育への要請の変化

現在、大学は教育の質保証という社会要請の下に厳しい評価が求められている。学習成果・ラーニングアウトカムズという言葉に代表されるように、成果に向かって学生が学習しているか、学習が促されているかを厳しくチェックしていく。その中で、学習者の主体を育てていかねばならないということから、従来のティーチングを主体とした教育からラーニングを主体とする流れができてきた。加えて、2008年の中央教育審議会の学士課程答申において、ラーニングベースの教育を作っていくことが政府として確認されることとなった。大学に従来の知識習得の場という機能以外に、知識活用能力の養成の場という期待が加わったのである。

２．学生の学習・生活実態把握の必要性

学生がどのように学習していくのか、目指すところへ向かっていくのかを評価するために、データの収集が必須となる。これは単なる大学の学生生活実態調査のようなものではなく、大学教育の期待するゴールに向かって学生はどう生活しているのか、どう学習しているのか、その実態はなんなのか、という観点で把握する必要がある。学習時間・学習意欲・学習行動は言うまでもなく、多くの大学が行う教育学習支援プログラムとの関わり、教員と学生の交流状況、大学生活の過ごし方、キャリア意識な

ど、様々な角度からのデータを収集する。そして、大学教育の個別の最小単位となる授業を元にした直接評価、そして学生の日常学習・科目選択など直接評価ではわからない部分を間接評価として集めることで、質保証へつなげることとなる。

３．学生の学習・生活実態

全国調査やいわゆる一般的なデータを元に、次の 3 つが指標になりうると考えている。一つは「学習時間」。授業時間外にどれだけの学習をやれているか、これを具体的な時間数として見ることで、国際的な指標にもなる。二つ目は「学生の一週間の過ごし方」。これはいい学生というのは一週間をどのように過ごしているのか、という観点で指標となる。三つ目は、今回の話題からは外れたものになるので割愛するが、「キャリア」について。いわゆるいい学生というものは、一回生の頃から将来に対する意識が高く、教員が期待する授業を積極的にとりながら 4 年間を過ごしていく、ということがわかってきている。

学習時間を「授業学習」とレポートなど授業の課題を行う「授業外学習」、そして自主的に課題を設定して行う「自主学習」と区別すると、4 つのタイプに分けることができる。よく授業外・自主学習をしているタイプを取り上げて学習時間を試算し（約 9 時間）、米国で危機的状況だと叫ばれている大学生の学習時間（12 時間）と比べると、3 分の 2 程度でしかないことがわかる。更にこれを米国のトップクラスの大学生の平均学習時間（22～25 時間）と比べれば、差は歴然である。このことより高等教育関係者としては、まずはどんな形でもいいから授業外学習の時間を増やすことを課題と考えている。

「学生の一週間の過ごし方」については、学生が行う一般的な活動を 17 項目に分け、それぞれ費やす時間を尋ねる、その反応パターンを因子分析・クラスター分析を経て、まとめた。これを通していい学生というものを考えていくと、友人・クラブサークルと自主学習・読書が両立する学生がこれに当たると思われる。大学教育の観点からすると、ただ環境に適応するだけではなく、そこからもうひとつ自分の将来に向けて自主的に勉強していく、読書をしていく学生を育てていかなくてはならない、ということになる。

なお、京都大学では今までつぶさに学生の実態を集めたデータが存在しないため、2 年間をかけて、全学的なデータをとっていく準備を行ってきた。今年から京都大学の学生の実態が明らかになるはずである。

４．アクティブラーニング

アクティブラーニングとは授業者からの一方的な知識伝達型授業、学習者の受動的な学習ではなく、学習者の能動的な学習を取り込んだ授業形態を特徴づける包括的用語と定義される。アクティブラーニング型授業は多様であり、教員が予めデザインをして、そのうえで学生たちが、教員が期待するような学習に巻き込まれていく、というデザインを少しでも取り入れていれば、大人数の講義であってもアクティブラーニング型授業といえる。日本におけるアクティブラーニングはまだ試行段階だが、いろいろなことを試しながら進んでいるという点では意義深い。ただ、日本の授業構成として特徴的なものである講義科目と演習科目の分離は、新しい学習というものを考えていく上で大きな足かせとなっているのも事実である。北米に代表される講義と演習のコンビネーションを日本の教育にどう取り入れていくか、これから精一杯考えなければならない課題となっている。

（みぞかみ　しんいち）

講演２：ポストラーニングコモンズとしての『アカデミック・リンク』：高等教育・学習に変革をもたらす新しい大学図書館のすがた

千葉大学文学部 教授 /附属図書館長、
アカデミック・リンク・センター長
竹内 比呂也

多様なメディアが登場するなか必要な知識の入手先としての書店、大学図書館の重要性は同時並行的に低下していると言われるが、これまで蓄積された知の総量からみればその流通に大学図書館が関わり続けることは必要である。現在求められている「《教える》から《学ぶ》への転換」「学士力」等に対し、大学はどのように取り組むのか、図書館はどう関わっていくかということが、時代に即しつつその責任を果たしていくことであろう。

◯過去から学ぶこと

1960 年代に始まった指定図書制度は教育側に受け入れられず教育に資するコンテンツとしては必ずしも成功したとは言えなかった。1970 年代以降国レベルでの政策的議論の中心は研究支援に移り、外国雑誌センター館制度、ILL システム、電子ジャーナル等の形で情報の共有化は改善されたが、学習・教育についての図書館の関与についての言及は少なかった。1990 年代に入り図書館では情報リテラシー教育への関与が積極的に議論されるようになり教育側への働きかけもあったが、これは残念ながら「一方的な片思い」だった。その後教育改革の機運が高まるなか、ラーニング・コモンズが注目を浴びるようになる。大学図書館が教育改革を主導することが、大学図書館の学習支援、教育への関与の成功に不可欠になってきている。2010 年 12 月に出た『大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－』（科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会）では、大学図書館のあり方について、学習支援および教育活動への直接の関与を始めとして従来よりも踏み込んだ活動が求められている。単なる場所や施設の提供だけではなく、図書館員による自学自習支援や、学生サポートスタッフの組織化、ラインティングセンター機能、学生教職員の知的交流活動の活性化に加え、直接的な情報リテラシー教育、メディアリテラシー教育も必要とされる。

◯アカデミック・リンクとは

アカデミック・リンクは上記レポートに書かれていることのかなりの部分をカバーしているが、そのベースには以前から実施されていたリエゾン・ライブラリアン・プロジェクト、総合メディアホール構想がある。

基本的なコンセプトは伝統的な図書館蔵書だけでなく電子ジャーナル、その他新たに電子化した多様な情報—コンテンツと、教員・図書館職員・学生スタッフらの人的サポートとを融合させることにある。いわゆるラーニング・コモンズはアカデミック・リンク構想のなかでは「アクテイブ・ラーニング・スペース」と位置づけられるが、これに加えて、様々な情報資源を講義のコンテクストや学生のニーズに応じた形でコンテンツ化する「コンテンツ・ラボ」、

教員や学生スタッフをサポートする「ティーチング・ハブ」の 3 つが協力してコンテンツと人的資源の融合を支えていく。そのためにアカデミック・リンク・センターは研究開発部門（教員）とアクティブ・ラーニング推進部門（教員・図書館員）を備えている。この 2 部門の人材が全学的な FD/SD、ラーニングマネジメントシステム、Shibboleth などの認証機能などを組み合わせたコンテンツ提供、従来コンテンツになっていなかった情報資源のコンテンツ化、学生の情報利用行動の観測、新時代の図書館職員の育成、学生の学習力・教員の教育力の向上、学生が参加することで自ら学ぶ力を向上させる機能などを実現する 7 つのプロジェクトを実行中である。

◯アカデミック・リンクの目指すところ

アカデミック・リンクの目標は学習環境とコンテンツ提供環境の融合を基本として様々な学習支援を実施すること、そしてコンテンツを活用したアクティブ・ラーニングを実現し、知識基盤社会においてコンテンツを十分に活用しながら生涯学び続けることができる人材を輩出することである。

講演会場と参加者（ライブラリホール）

単なる資源のデジタル化や、学習スペースの提供ではなく、より抜本的に学習・教育に関わるコンテンツ提供環境を作り変えようとしている。このことにより高等教育における学習とコンテンツ利用を融合させた新たな学習環境構築の先導的モデルとなりたい。

学内的には 4 年間の時限付きプロジェクトであり、期間終了後は図書館、情報基盤、普遍教育センター等の組織がそれぞれ具体的なオペレーションを引き継ぐことになる。壮大な実験ではあるが、これにより状況を少しでも変えていきたいと願っている。

（たけうち　ひろや）

質疑応答・パネルディスカッション

出席者：古賀 崇（司会・進行）
溝上 慎一、竹内 比呂也

I. パネルディスカッション

古賀：お互いの講演につきコメント・感想をお願いしたい。

溝上：竹内氏の講演は刺激的で勉強になった。竹内氏の「図書館側は、教育改革に直接かかわる形で、教育改革を促進する可能性がある」に対して、参加しているみなさんはどのような近さで受け止められたのかが気になった。今教員側がなかなか前に進められない課題に対して、図書館側が絡むことにより、前に進むことができればよい。この他、竹内氏の講演を伺い、可能性として感じたことを数点申し上げる。

・教育改革のフロントからすると、講義後の演習は必要で、教員側もそれを課題として模索している。竹内氏が今後の可能性として挙げられた中で、図書館職員の自学自習への支援、上回生等を使ったピアサポートなどを活用し図書館の学習ス

ペースを演習する場として使うことに関しては、教員側もお願いしたくなるのではないか。図書館の学習環境を利用させてもらったら、教員側は喜ぶ。

・ラーニングコモンズは面白い取り組み。ラーニングコミュニティの可能性のひとつとして捉えることができないか。授業と絡まない図書館による自学自習の支援。学生が自分の学んだことを学生に相互に教えあい、刺激される。自学学習を促進するきっかけとなる。そのきっかけが図書館のラーニングコモンズであってもいい。

・学部の演習では、PC 演習室が決定的に不足しているので、図書館スペースを演習で利用できるならありがたい。学生も図書館に行くことになり本に触れるようになる。図書館にもメリットがある。

竹内：私の立場で教育の改革を申し上げるのはおこがましいと思うが、溝上氏の講演を聞き大筋のポイントは外していないと感じた。アカデミックリンク（以下 AL）がやろうとしていることと溝上氏の取り組みは向かっている部分は基本同じだが、それぞれの立場によって資源が違い、アプローチが違うと理解している。

溝上氏のコメントについての意見。

・図書館職員による自学自習の支援は、まだ行われていない。これは実現に向けたハードルは高い。学習を支える人材については、一人あるいは一種類の人々でできることを考えるべきではなく、いろいろな専門知識、得意分野を持っている人が集まることによって可能になると考えている。うまく協力しあえる形を整えることが成功の鍵なのではないか。誰がコーディネートするのかという問題はあるが、AL ではハイブリッドさを追求しようと思っている。

・AL で重視しているのは授業。授業は要である。AL の活動も授業と切り離されたものではなく、教員の理解を得ることが重要。

・千葉大では、プロジェクタはどの教室にも整備されている。また AL の半分は、自由に使える空間で、ディスカッション等自由にできる空間、PC をたくさん設置しているスペースもある。

II. 質疑応答

質問者（京都大学職員）：竹内氏に。AL は時限プロジェクトというお話。時限的な話と教育学習支援の持続性の関係について、教えてもらいたい。

竹内：AL は理念である。この理念を実現するのに必要な研究開発を行うセンターが時限で設置されたということである。実際のオペレーションはセンターがなくなった後は既存の組織が担うことになる。

質問者（国立民族学博物館職員）溝上・竹内両氏に。教員、学生、図書館職員三者の今後の構造や役割は変化してゆくのか。

溝上：知識の理解から知識の活用へ、教育の構造の変化が進んでいる。

竹内：今後人的構造の変化が起きる可能性がある。教員と学生の関係はすでに若干変わりつつある。図書館職員も変わるであろうし、変わるべきである。教員とグループになり、教育にかかわるべき。

溝上：職員は、伝統的な枠組みの中で働く職員もいるが、他方で枠を超えて仕事をすることを求められている職員も、今後は出てくるのではないか。

質問者（神戸女学院大学職員）：竹内氏に。教育の支援について、教員へのアプローチをどのように参画していくべきか。

竹内：千葉大では、図書館員と教員との連携を強めるためのプロジェクトを進め、成功しており、このことは教員、職員の双方に認識されていると思う。また、教員に対

して AL サポーターという呼称を付与し、教員に AL にかかわってもらうことを考えている。図書館職員は教員には影響を与えられない。教員に影響を与えるのは、教員と学生。例えば、AL を使った学生から「AL をつかってよかった」と教員に言ってもらう、あるいは教員同士で AL の話をしてもらうなどサポーターの教員から広げていくなどを考えている。

古賀：溝上氏に。教員の立場から、図書館職員の働きかけについてどう考えるか。

溝上：教職協同は難しい課題である。職員が教育に対してできることをリンクしに来てくれると、教員側はつながりたくなり、それが事例になっていく。

質問者（県立広島大学職員）：竹内氏に。図書館職員が学習支援にどうかかわるか、どこまでできるのか、AL の具体的な構想とは。

竹内：職員も学生と向きあっているが、学習支援は難しい。教員と密接に連絡を取りながら、まずやってみるしかない。千葉大のリエゾンライブラリアンはひとつの解。大学によって環境は違う。答はないが方向性はある。

参加者の質問に回答する講師

古賀：まとめの言葉、図書館職員へのメッセージをお願いしたい。

竹内：AL はスタートした。図書館の可能性を追求し、図書館の理念を発展させたい。ご支援をお願いしたい。

溝上：図書館の役割について、考える良い機会となった。学習支援をしていくひとつの機関なので、これを機会に意見交換をしたい。